

提督が鎮守府にイーグル  
ルダイブしたようです。

たかすあばた

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

アサクリ2よりも後の時代、フランスでアシンとして活動していた男が気がついたらどこぞの鎮守府にワープして…

言語の壁はなし。

妄想全開、設定ガバガバな小説ですが呼んでみてください。

# 目次

鎮守府へのイーグルダイブ	1
第2話 鎮守府正面海域奪還	14
第3話 天龍型の優しい方	27
第4話 エラー	44
第5話 魔窟へ	51
第6話 急転	61



# 鎮守府へのイーグルダイブ

どこまで……どこまで私は無能なのだろうか？

命からがら、仲間を引つ張り帰ってくる仲間たち。その後方では、敵が今にも上陸せんとしていた。

人類の敵。青白い肉体に、不気味な兵装を携えて海を歩く、深海棲艦。

「司令、早く指示を!!」背後から声をかけてきたのは、現在、秘書を任せている不知火だった。震える手で無線を手に取り、声を出そうとする。が、言葉が出てこない。なにも、思いつかない。頭が真つ白だ。ただ、開いた唇をアワアワと震えさせるだけだった。

「司令!!」

次の瞬間は、目の前も真つ白だった。突然目の前を覆った熱が、暴風が、それ以上の思考を奪い去って行った。

なんと言うことだ。テンブル騎士団がまさか俺たちの砦に乗り込んでくるとは。

「俺のせいだ!!すみません!すびません!!」傍らで泣きじゃくるのは、近々アサシンの

承認試験を控えていた訓練中の若者だった。中々センスがよく、半人前ながら度々任務に同行することもあった。今回も他のアサシンの任務に後方支援として参加していたが、仲間たちが任務に失敗、その旨を伝えるべく一人砦に向かう所を、テンプルの兵に尾行されたらしい。

これで今回のマスター承認は見送りだな……。俺自身も近々、かの伝説のアサシン、アルタイルに次ぐ若さのマスターアサシンとして、昇任試験を控えていた。が、今はそんなことはどうだっていい。アサシンのユニフォーム、ローブを身にまとう。胸当て、肩当て、すね当てにアサシンの象徴である、「必殺の籠手」。それに剣、短剣、クロスボウ、投げナイフ、各種爆弾。それらを装備し、アサシンに代々伝わる、「緊急出動」用の窓に向かう。今日はずいぶん霧が濃いな。

「やめとけ、ファイル。今日はイーグルダイブは危険だ。」止めたのは、長く共に修行を続けている仲間、アドルフだった。このところは私のマスター昇進に対して悪態をついてくることも多いが、影では他の仲間たちに「自慢の友だ」と誇らしげに語っていることを知っている。

「心配するなアドルフ。見えてなくても俺の体は覚えているよ」

飛び込み台に立つ。何年も、何回も飛び降りてきた、木の板。霧でよく見えないが、麓にはいつも通り藁が積んである。うまく受け身をとれば、優しく俺の体を包み込んでく

れる。そう信じて、俺は前に体を倒した。

おれは、「マスターアサシン（予定）」、リンヒル・フィリップス。

長い霧を抜け、見えてきたのは、藁……じゃない、屋根だ!!フィリップス（以下、フィル）は急いで体勢を立て直し、片膝立ちの状態で着地する。じくと足がしびれる。が、平気なようだ。おかしい、あの建物から飛び降りて、藁を外れて骨折した仲間を何人も見たが。そう思いながらフィルは顔を上げて、そして固まった。

あれは、なんだ？海だ。こんなもの砦の前には無かった。それよりも、海からあがってくるあいつらだ。間違いなく、テンプルの連中ではない。いや人間でもないのか？肌が青白い。死人だつてああまで青くはならない。それが、腕やら頭やらに括り付けた大砲のようなモノでこちら側を狙っている。それに応戦しているのは……女の子？それも年端も行かないような、小さな子ばかり。彼女らも奴らと同じように大砲やらを抱えているが、火力が違うらしい。押され気味だ。

「司令、しっかりしてください！意識を失ってはいけません！」足下から悲痛な叫びが

聞こえた。よく見ると屋根は足下で崩れ、部屋がむき出しになっていた。そこにいるのは、桃色の髪をした少女と、抱えられ、血にまみれた男性。念のため、フィルは「目を凝らした」。やはり、あの青白い連中を敵と考えて問題ないらしい。フィルは屋根から部屋におりる。「！何者ですか！」少女の質問を無視し、男性に駆け寄る。が、直後に足下に発砲を受けた。目の前の少女が撃ったようだ。「質問に答えてください。でなければ次は当てます。」その目つきは、さながら武人とも呼ぶべき鋭さでこちらをとらえている。それもそうだ、こんな重装備で身を固めた見知らぬ人間が近づいてきたら、警戒するに決まってる。フィルは、やむを得ずそこで静止した。

「mゴホツ、味…方か…？」男性が目だけをこちらによこし、訊ねる。

「…そのつもりだ。」両手を広げ、無抵抗をアピールしてみるが、少女はこちらに大砲を向けたままだった。

「…たの…む…」

「司令!」意識が朦朧として判断力が鈍っているのか、初対面の人間を頼るという「司令」と呼ばれる立場の人間としては信じがたい判断。それに驚いた少女が視線をこちらから切ったのを見て、フィルはおそらく壁があったのだろう方向へ走り、飛び降りた。

広がっているのは、受け入れがたい光景。少女が血を流し、倒れ、仲間に引きずられ、戦う姿。しかもよく見ると数名、全く同じ顔の少女もいる気がする。双子にしても、似



すぎている。近くにいた何人かが、驚いた様子でこちらを見る。

「はわっ誰なのですか!」変わった驚き方をする少女を無視し、ファイルは剣を抜き走り出す。

まずは一番近い敵。こちらに気づくより早く、射角の内側に入る。斬りつけるが、堅い。ならば露出している肌はどうだ? 剣を逆手に握り突き立てると、足を見事に貫いた。よし、いける。直後に腕をひねり武器を奪おうとしたが、武器に引き金が見当たらない。ならばと、ファイルは動きにわざと間を置いた。砲筒がこちらを向く。砲撃の間、腕を捻り他方の敵に向ける。同士討ちの形になった。また、他方の敵がこちらに照準を定める。ファイルは傍らの敵を盾にする。味方の攻撃をもろに受け、敵の体から力が抜けたのを感じる。

少し手間取ったが、まず一体。そのまま敵の亡骸を盾にしながら、混乱する敵の中に飛び込んで行く。動きに緩急をつけ、狙いを定められ辛くするのは、長年の癖である。煙玉の一つ。即座に、「目を凝らす」。自分を指導した師達は、この目のことを「鷹の目」と呼び、「伝説のアサシンの片鱗だ」と驚いた。

煙が立ちこめる中でも、敵味方を区別することができる。敵を覆う装甲は恐ろしく堅いが、それならば隙間に剣を突っ込んでやれば良い。少し離れた敵にはボウガン。攻防を続けるうちに、剣が切れなくなってきた。後で研ごうと思つて、剣を放す。今が好機

とばかりに、敵が雄叫びをあげながら詰め寄ってくる。ファイルは両の手をだらりと下げると、籠手につけられているピンを引いた。

アサシンブレード。「最強のアサシン」と唄われたエツイオ・アウデイトーレ・フィレンツェが用いたダブルブレードのスタイル。

首に一刺し。亡骸をまた盾にし、籠手に搭載された銃を一発。武器を失ったはずの敵からの反撃に、ファイルを取り囲む深海棲艦たちは完全に混乱していた。ファイルを取り囲む輪が崩れ、ファイルは一体の敵に狙いを定めた。「鷹の目」で、ひときわ目立っていたやつ。指揮官だ。目の前の敵を刺し殺すと、それが崩れ落ちる前に駆け上がった。防衛もままならない、信じられない、混乱していると言った顔でこちらを見上げるそいつに、覆い被さり、ブレードを振り下ろした。

あの人間は何者だ??陽炎は応戦するのも忘れ、自分たちの背後から現れた人間に見とれていた。

「陽炎、危ない!」誰かに抱えられ、大きく転ぶと同時に、先ほどまで自分の立っていた

場所で爆炎が上がった。見上げた先にいたのは、吹雪だ。吹雪の放った一撃が、先ほど自分を襲った口級を倒した。

「吹雪…あれ、何者なの…?」

「わかりません。味方なのででしょうか…」

人間が携えているのは、艦載機に変化したりする訳でもない、ただの剣やボウガンといったアナログなモノばかり。それが、敵の攻撃を防ぎ、躲し、次々となぎ倒して行く。確かに自分たちは肉体こそ人並みであり、包丁で怪我をすることもあれば転んで膝を擦りむくこともある。しかし、戦闘になれば何十kgという主砲を携え、振り回し、強靱な装甲を身にまとうことで身を守る。泣く子も黙る、「艦娘」なのだ。それは敵も同じであり、あんな、あんなふう接近して戦えれば苦労はしないはずなのだ。

それがどうだ。男は背中に目がついているかのごとく、至近距離の攻撃を見切り、的確に急所をしとめて行く。そして煙から飛び出したかと思うと、敵の旗艦に飛びかかり、とどめを刺してみせた。ゆらりと立ち上がった男の背中に見えたのは、見たことの無いマーク。A…?」

「すごいのです…」 眩いたのは、電だった。

統制が崩れたためか、それとも異常な敵の出現に恐れをなしたか。深海棲艦が次々に海へと逃げて行く。最後に一矢報いんと襲いかかってくる敵も、次々とあしらう。

「キャアアアアアアア！」

男も、他の仲間達も一齐に叫び声の方を向いた。軽巡ト級が、満潮を人質に取っていた。

人質を取る程度の知能があるとは思わなかった。しかし、恐怖のためか、意識は完全にこちらしか向いていないようだった。ファイルは、人質を取る敵の後方、茶髪に小さなツインテール、つり目がトレードマークの少女を視界の端に入れていた。目が合う。何かを察したように。そっと動き出す少女。ファイルは敵の意識を自分からそらさせないようにつとめた。右の籠手に手をやり、外す。次に左の籠手。胸のナイフ。最後にフードを外し、両手を上げる。どれも、少しオーバーに。その間に、少女が視界から消えている。目を凝らせば、敵の後方から漏れる気配。ファイルは、口笛を一つ鳴らした。

気持ち小さめな爆音。狙いを定めやすかったのだろう。捕らえられた少女が巻き込まれないよう、最低限の攻撃で敵の急所を射止めた。敵が崩れ落ちる。

「満潮ー」茶髪の少女と、先ほど茶髪の少女と一緒にいたもう一人が「みちしお」と呼ば

れた少女に駆け寄る。

「陽炎……」

「怪我は無い？」

「う……うわああああん!!」

「はいはい、恐かったね！よく頑張ったね！もう大丈夫よ」周りを見渡せば、敵は一体も残っていないかった。辺り一面に残骸。少女らは怪我をしているものの、死人は出ていない様子。安心して一つ息をつくとき、背後から ガチャリ と物騒な音が聞こえた。

「不知火！」「かげろう」と呼ばれた少女が叫ぶ。気配には気づいていたが、あえて何もしなかった。先ほどの桃色の髪の少女だ。「しらぬい」というのか。

「あなたを本部に連行します。抵抗はしないでください。」

「不知火、その人は……」

「わかっていきます。なるべくなら、貴方を撃ちたくはありません。おとなしく従ってください。」ファイルは再び両手を上げ、不知火の指示に従って歩き出した。

一応ドアが閉まって入るが、ひび割れた壁から外気が漏れている。先ほどの男が居た

部屋のようだ。「司令」と呼ばれていたな。彼は無事だろうか……無事と言えば、私の居た砦だ。アドルフは、部下達は、砦を守ってくれているはず。突然いなくなつた私をどう思っているだろうか……

「司令、すっかり！」ドアが開けられ、担架に乗せられた男が飛び出してきた。男は一瞬こちらを見ると、うめくような声を上げた。

「と……止まってくれ不知火……」ファイルは両手にかけてられた錠をならしながら男に近づいた。「話は……聞いた……怪我は無いか……？」

「アンタの方が重傷だ。喋らない方が良い」

「はは……すまない……」再び担架が走り出す。

「こちらへ」不知火と呼ばれ、ファイルは風通しの良くなつた部屋に入る。「提督代理、秘書官の不知火と申します。これより貴方には、海軍本部にて取り調べを受けてもらいます。」あくまで、気丈に振る舞っている。が、本心はあの男が心配で仕方が無いのだろう。なぜこんな子供が？彼女だけじゃない、この建物で見る者見る者、みんな子供ばかりだった。「何か？」しばらく彼女のことを見つめてしまつていたらしい。不審な目でこちらを見ていた。

「いや……、フィリップスだ。」キョトンとした。少女らしい表情を見たとファイルは少し安心する。「俺の名だ。リンヒル・フィリップス。お見知りおきを。」冗談めかした言い方で、

笑顔でお辞儀をする。

「ええ……」しかし、すぐにまた先ほどまでの無表情に戻ってしまった。不知火がちらと時計を見る。「間もなく迎えの車が来ます。ついてきてください。」部屋を出て、廊下を歩き、階段を下りて玄関を出て……ファイルはたじろいだ。

窓のついた黒い鉄の箱が、唸りをあげている。これは一体なんだ？それは思考と同時に、ファイルの口をついていたらしい。「……車ですが。」

「車……？馬はいないのか？」不知火は構っていられないと言った顔を見せる。

「早く乗ってください。」言うと同時に、ファイルは箱に押し込まれた。……柔らかいソファだ。すぐ隣に不知火も乗り込んできて、ボタン！とドアを閉めた。「出してください。」前方の椅子に座る男性が軽くうなずくと、ファイル達が入っている箱はより大きな唸りとともに少しずつ動き出した。

「うおっ」初めての経験に、思わず声が出る。

「……車に乗ったことが無いのですか？」不知火が不思議そうに問いかけてくる。

「あ、ああ……便利なモノだな。」車（らしい）は、馬よりも速い速度で進んで行く。

「お入りください。」ファイル達が入ったのは、先ほどの司令の部屋を、さらにランクアップさせたような、つまりはもっと位の高い人間の部屋なのだろう。正面の机には、50半ばほどの男性が座っていた。その男は、すっと目を細めてファイルの目を見、そして近くにいた男に錠を外すように命令し、そして不知火には下がっているようにと手を振ってみせた。

「いいのか？」ファイルが男に投げかけたのは、当然の疑問。得体の知れ無い男の錠をそんなに簡単に外してよいのだろうか。

「鎮守府を身を挺して守ってくれた男にいつまでも手錠をかけているなど、それこそ失礼に値するというモノだろう。わたしは巖 春樹という者だ。よろしく。」そういうと男は姿勢を直し、打って変わって厳しい瞳でこちらを凝視した。「さて、と。フィリップスくんと言ったかね。君は何者だ？」

「…何者に見える？」両手を広げて、自分の姿をアピールして見せる。

「籠手に隠された出し入れ可能な小剣…さしずめ、暗殺者…と言ったところかな？」

「ご名答」ここからどう話すべきかな。「…道に迷ってたらいつの間にかあそこにいた…なんて言っても信じないだろうな」

「それはそうだろうな」ニツ、と巖は微笑む。けど目が笑っていないぜ？



「俺としてはどこか人が居そうな場所さえ教えてもらえればすぐにでもここから出ていくんだけどな」

『暗殺者』を名乗る男をそうやすやすと自由にすると思うかね？」

「それこそごもつともだ」

巖は席を立ち、ゆっくりとファイルに近づくように歩き出す。

「君には我々の監視下に入るといふ名分において、宿毛鎮守府の提督として着任してもらう」

「さっきのあそこの？あの人の良い兄ちゃんはどうした」

スツと、巖の目つきが厳しくなり、全てを物語る。

「彼は君がここに来る1時間ほど前に、死亡が確認されたよ」

扉の向こうで、誰かが膝をつく音がした。

## 第2話 鎮守府正面海域奪還

前任の金子という男は、心優しいがどうにも提督には向かず、また、運のない男だったらしい。

提督としては、ギリギリ及第点。そして提督として鎮守府を運営する中でも、ことごとくついていなさぶりを発揮していたらしい。

初めに提督に与えられる艦娘は、「駆逐艦娘」と呼ばれるもつとも小型で、見た目も正に少女と言ったところ。その後様々な任務を遂行するにあたって、より大型な軽、重巡洋艦、戦艦と言った艦娘が必要になってくる。艦娘の入手方法は大きく二つ。海上を彷徨う艦娘を勧誘するか、鎮守府内の工蔽ドックと呼ばれる場所で新たに建造するか。いずれも狙った艦娘を仲間にするのができないのだが、金子提督は駆逐艦娘ばかりを引き当て、そのうえ度々同じ艦がいくつも被っていたという。そしてその誰もを無碍にすることができず、いつしか鎮守府内は同じ駆逐艦娘で一杯になってしまった…

ファイルが作戦会議室に入ると、数十名の少女が出迎えた。陽炎が4人、不知火が5人、雷3人、電が2人、大潮が2人、満潮が3人、吹雪が4人、e t c…

何とも不思議な光景だが、金子提督が愛情を注いで接していたらしい、同じ艦同士も

特に不和があるという訳でもない。しかし一応区別がつくように、同じ艦でも髪を降ろしたり、服を変えたりしている。一通り見渡して、ファイルは最初の言葉を上げた。

「初めまして諸君、俺が本日より当鎮守府に提督として着任する、リンヒル・フィリップスだ。気軽に『ファイル』と呼んでくれたまえ。よろしく。」ニコツと頬を上げ、一礼する。

「よろしくお願いします」「よろしくなのです!」「よろしく…」新任の提督を不安にさせまいと、元気に返事をしてきている子もいるようだ。満潮の中に昨日助けた者を見つ、微笑んでみるが、そっぽを向かれてしまった。ファイルは苦笑いし、先の言葉を紡ぐことにした。

「前任の金子提督とは、一度すれ違っただけだった。けれども彼は、煤にまみれた俺の姿を見て、第一に心配してくれた。自分は腹におききな穴をあけてだ」少女たちの視線が少しうつむく。こんなに愛されていたのに、罪な男だ。「一応俺は皆の上に立つて指揮を執る立場だが、正直海の戦いについては全くのシロウトだ。だから、命令だとか不躰なことは言わない。皆の持つてるその力、頭、そして勇氣!俺にほんの少しずつでいいから、貸してくれ」その言葉に、数名の視線が揺らいだ。「俺からは以上!」

情報では、奴らは完全に撤退したわけではなく、鎮守府近くの海上に居座っているという。通常であれば練度の低い艦隊などの訓練に用いられる鎮守府正面海域は、現在完全に深海棲艦の勢力下にあり、駆逐艦娘しかいない今の我々では、攻められれば奴らの再上陸は免れない。艦娘の装備は砲撃などの遠距離攻撃が主で、白兵戦は想定されていないしその心得もない。「つまり……」淡々と説明を続けていた秘書艦の不知火も、流石に言葉が詰まった。

「上陸してきた敵を俺が倒すって話か」まさに、無茶苦茶。しかし、今できる最善の策かもしれない。フィルは思わず苦笑いした。

「それも、あなたがこの提督として指名された理由の一つです。戦闘となった場合は、我々が海上を進んでくる敵を迎撃しますので、提督には上陸してくる敵の排除をお願いします。」今は、納得する以外にない。彼女たちは今、信頼する司令官を失い、しかし落ち込んでばかりいることもできない現実と向き合い、心に鞭を売って私に付いてきてくれようとしているのだ。フィルは一つ息を漏らし、そして吸った。

「よし、提督の仕事をしよう。まず工敵に向かう。」

「はい。」

鏡を見ると、そこには一人の少女が立っていた。腕を動かし、足を動かすと、その少女はしたがって動いて見せた。これが：新しい：艦娘として生まれ変わった「俺」の姿か。

「フツ…」眼帯に、腰に携えた：彼女は刀を抜いて見せた。丹念に研がれた刃が、目元で眩しいくらいにきらめいて見せる。「中タイカすじゃねえか…」これでまた戦うことができる：荒々しいときめきを胸に、扉をけ破った。「待たせたなあ！俺の名は、天龍!! フツ、恐い：か？」工蔽には、忙しく走り回る妖精以外、誰もいなかった。「んだよ：せつかく仲間のお出ましだったのに歓迎の一つも」ドオン！突然どこから激しい爆発音が聞こえた。いや：これ、さつきからずっと鳴ってねえか？ふと気づいて足元を見ると、妖精がどこかを指さして天龍の足を引つ張っていた。「な、なんだよ。わかっただ、行くから落ち着けて。」妖精についていく道すがら、天龍は違和感を感じていた。この鎮守府、ずいぶんボロツチくねえか？？ヒビだらけじゃんか。何やってんだこの提督はよ：そんな天龍の悠長な思考は、建物から出た瞬間に一変した。

次々と押し寄せる深海棲艦たち。必死に迎撃するのは駆逐艦娘ばかり。火力が足り

ないんじゃないのか？そう思い浜に目を移すと、チラホラと浜をあがって来る敵の姿があった。

「おいおい…上陸されてんじゃねえかよ…」しかし、それと同時に天龍は信じがたい光景を目にする。提督の帽子をかぶる男。デザインにどこか、古めかしさを感じるマントを羽織ったその男は、その身なりにはおよそ不釣り合いと思える無線を腰につけ、時々そこに何かを叫びながら深海棲艦の群れに突っ込んでいく。敵は砲撃するが、男はすでに転がっている敵の亡骸に隠れやり過ごす。そこからさらに急接近、急所に一刺し。崩れ落ちる亡骸の背中を転がると、次の敵が向けようとしてきた主砲を腕ごと切り落とす。すぐさま男が「手の平を敵の胸に押し当てる」と、敵の体が力なく崩れ落ちる。なんだあいつ…新種の艦娘か？しばらくその男に見とれていると、足元の妖精が男を指さしながら何かを訴える。

てーとく！てーとくにはやくつーしん！

「てーとく」…？提督…あれ、やっぱ提督！提督つよっ！！

てんりゆうはやく！つーしん！

「わ、わかったよ！ちよつと待て！」艦娘には標準装備の無線機能で、提督の無線に周波数を合わせる。その間に、足元の妖精も専用の小さな無線機で提督に入れているた。

てーとく！てんりゆうできた！ふたりめのけいじゅんようかんむすだよ！てーとく！

天龍の無線にノイズが入る。

『君が天龍か！』

「お、おう！俺の名は天龍！フフツ、恐いk…」

『天龍、スマンが挨拶は後回しだ！今すぐ駆逐艦数名を引き連れて、先に海に出た那珂の艦隊を援護しに向かつてくれ！血路は俺が開く！』やる気があるのかないのか、その姿とは少しギャップのある緩い口調で話す男は一瞬天龍の方を見ると、天龍の正面の浜に向かつて走り出した。

「…フ…」口から洩れた小さな笑い。それは、考えに考え抜いた決め台詞を2度にわたって無視された己への嘲笑などでは、決してない。断じてない。男の見せる、無双のごとき強さ。その背に纏ったローブに刻まれた、謎のマーク。男が両手から飛び出させた、隠し剣。そのすべての所作が、彼女の魂の奥底を震わせた。その震えは先刻、生まれ変わった自らの身を包む眼帯や刀を見た時と同系統の、しかしその何倍も大きいものだった。「フ…フフハハハハ!!!!いいだろう、俺の華麗なる初陣、しかとその目ん玉に焼き付けな！天龍、水雷戦隊…出るぜ!!!」

「痛いって言ってるじゃん！」那珂が声を上げるとともに、レ級を撃沈する。「プロデューサーが営業頑張ってくれてるんだもん！那珂ちゃんもイイトコ一杯、いーつぱい見せないとー！」

「その例え、合ってるの!？」応戦しながら、陽炎が突っ込む。

「こ、細かいこと気にしない！そういうモチベーションでつて話！」

「くつちやべってないで戦闘に集中してよ！キヤア！」

「霞ー！」「霞ちゃんー！」

「クツ…油断したわ…でも、まだ戦えるー！」そういうが、霞は装備がいくつか動作不良になっっていた。

「無理しないで、中破してるじゃない！」大潮が霞に急いで近づき、庇うような体制をとる。

「悪いわね…」いつもは強がった態度を見せる霞だが、姉妹艦の前では素直なことが多い。

「気にしないで！」



「でも、状況は変わって来るわね…」この中で最も経験値がある陽炎が呟く。そう、一人でも動きが鈍い者がいれば、そこに攻撃を集中するのは当たり前のこと。これから彼女らは、霞をかばいながら戦うことを余儀なくされるのだ。那珂すらも、常に絶やさぬ笑顔を忘れ、固唾をのむ。少しの間重い緊張が各員にのしかかるが、その空気もまたすぐに一変する。

深海棲艦への、別方向からの砲撃。その直後、上がる雄叫び。

「オラオラオラオラア！天龍様のお出ました！泣き叫べ、深海棲艦ども!!」

「はわわわ、雷もま、負けないのです！」天龍を旗艦とし、雷、吹雪、深雪、荒潮、もう一人の霞（便宜的に、霞B）。

「うるっさいわね！もう少し静かにできないの、あんたら！」呆れた顔で声を上げる霞B。

「天龍…！」声を漏らした陽炎を筆頭に、束の間安堵の表情を見せる。

「おいおいお前ら、俺の戦いぶりに見とれてテメエの仕事忘れんじゃねえぞ！」すかさず天龍が檄を飛ばし、陽炎たちも再び表情を引き締める。

「言われなくなつて！（元）第4水雷戦隊センターの力、見せてあげる！どっか——ん!!」

「攻撃よ！攻撃よ！」

「連装砲、てえー!」

「あんたの戦いに見とれなんかしないわよ!今更!」最後の霞の発言に、その場の誰もが賛同した。

今ここにいる誰よりも、まさに命がけで戦っている「人間」の姿を思い浮かべる。

「提督ががんばってくれてるんだから、私たちもここで倒れるわけにはいかないのよ!!」

執務室には、非番の艦娘たちが集まっていた。見つめる先には、無線に耳を傾けるフィルの姿。

「うん、うん…:よーうし。よくやってくれた。」その一言で、数名の少女が何かを察したように目を見開く。それを見たフィルも、口角をニツと上げる。「皆聴いてくれ! たつた今、天龍達が敵の艦隊を撃沈した! たつた今を以て、鎮守府正面海域は完全に俺たちの勢力下に入った!!」執務室のそここから歓声が上がる。それを聞きつけた他の少女たちも駆けつけ、ともに喜びを分かち合う。それを眺めていると、また数名の少女がこ

ちらを嬉しそうに、しかしもの悲しげに見つめていた。ああ、そうだな……。ファイルは机に立てられた写真に目を落とした。金子提督、安心してくれ、彼女たちは立派に戦っている。しかしファイルは、いつの間にか自分を見つめるまなざしが、増えていることに気が付く。視線を上げると、執務室にいる少女たちが、皆決意めいた眼差しでこちらを見ていた。

「ファイル司令。この度は、金子前司令の遺志を引き継ぎ、我らを指揮し、また、司令自らも命を賭して鎮守府正面海域奪還にご尽力いただいたこと、心より感謝を申し上げます。」言葉を並べるのは、秘書艦を務める不知火。

「ああ、君たちもよく戦ってくれた。こちらこそありがとう。」なおも、少女たちはファイルを見つめ続ける。今受け取りたいのは、感謝の気持ちなどではないといったふうになんだ、何を言いたい？

「司令。これからの戦いは、敵もより強力な戦力を揃えてくるでしょう。それに伴い、我々もより高い航行能力、耐久力、火力を伴った仲間が必要となります。しかし、今この鎮守府の宿舎は、大半が『同じ』駆逐艦が埋めてしまい、これでは今後新たな仲間が増えてもすぐに鎮守府内に収まり切らなくなってしまう。」話の途中から、ファイルは彼女たちが何を言おうとしているのかわかってしまった。「司令：我々を『近代化改修』してください。これは、ここに居る皆の総意です。」決意めいた瞳。もう、皆で話し合い、

納得したことなのだろう。ここに私が口をはさむのも、無粋だ。

「OK。…天龍達が入渠を終え次第、工蔽に集まってくれ。」

「はい。」「はい!」「はいなのです!」

ドックの中には、隠し扉があるわけではない。ドックに次々と入っていく、不知火「達」。

「お願いします。」不知火がそう言うと、ドックの扉が閉まった。妖精の合図とともにしまった扉から光が漏れる。光が収まって再び扉が開いたとき、そこに不知火は一人だけになっていた。トリックや、イリュージョンなどではない。完全に一人の不知火となったのだ。

「不知火…」ファイルが語り掛ける。

「はい…」一言応じると、不知火は何かを包むように両の手を胸の前で握りしめた。「皆…ここにいます…」寂しくありません。そんな顔で微笑んで見せた。

「司令官さん…!電たちのこと、忘れないであげてくださいね!」堪え切れず、泣きじやくりながらドックに入る電。

「ここままでしてやるんだから、皆のこと沈めたら承知しないんだからね！わかつてるの！」寂しさを、悪態で誤魔化す満潮。

「司令。14名、全ての近代化改修が完了しました。現在当鎮守府に在籍する艦娘は軽巡洋艦2名、駆逐艦24名の計26名です。」

吹雪、深雪、綾波、敷波、睦月、皐月、望月、曙、潮、雷、電、時雨、村雨、夕立、五月雨、涼風、大潮、満潮、荒潮、霞、陽炎、不知火、黒潮、天龍に那珂。改修前が50数名。ずいぶん少なくなったものだ：しかし、感傷に浸ってばかりもいられない。フィンは咳払いを一つ。

「君たちの活躍により、俺たちは鎮守府正面海域の奪還に成功した！」

「何言つてやがんだよ！撃破数トップの人間がよ！」すかさず茶々を入れる、天龍。調子に乗りやすいのが玉に瑕だが、自然と空気を和ませてくれる才能がある。周りの皆も、少し表情がほぐれたようだ。

「けれどもこの先の戦い、俺は手を出すことができない。戦いの場は完全に海上に移り、これからは君たちに体を張って戦ってもらわなければならぬ。」

「もともとそういうもんだつーの。提督が自分で深海棲艦と戦うことがそもそもおかしいのよ。まあ、色々と助けられたのは事実だけど。」呆れた風を装う曙。

「これからは僕たちに任せてよ、提督。必ず期待に応えて見せるからさ。」力強く言い切

る時雨。

「これからの戦いを前に、俺から一つ命令を：いや、皆約束してくれ。必ず、生きて帰ってきてくれ。皆必ず毎日、笑い、怒り、泣いて、語り合い、元気な声を聞かせてくれ」「電はいつでも元気なのです！」最初に声を上げたのは、電。それに続いて、ぽつぽつと声上がる。

「了解しました、フィリス司令官。」「何かと思つたら、アホらしい：」「当たり前だぜ！」「アイドルはいつでも笑顔なんだよ！」

ふと、フィリスは気配を感じたような気がして、少女たちの後方に鷹の目を向ける。成人男性と思しき気配が佇んでいる。気配は一回だけ頷き、姿を消していった。フィリスは、何かを託されたような気がして、少し複雑な思いを抱いた。

金子：俺は、この世界の間ではないのだ：。いつか、忽然と姿を消してしまうかもしれない。そのときこの少女らは、一体どんな顔をするのだろうか：不安を抱きながら、フィリスは目の前の少女たちに取り繕った笑顔で応じていた。

### 第3話 天龍型の優しい方

朝。リンヒルはカーテンから洩れる日の光で目を覚ます。布団もたたまず、寝巻のまま部屋を出ようとするが、腕には何故か籠手を着けていく。扉を開けると、剣を振り上げた天龍がいた。

「おりゃああああー！」

振り下ろされる腕を片腕で払い、もう片腕を天龍の喉元に突き立てる。小手に付いたピンを指で引くと、籠手の先から刃が——飛び出さなかった。点検のために、刃は取り外してあった。しかし、籠手には刃が仕込まれていると思ひ込んでいた天龍は、深海棲艦と見間違ひそうなほどに顔を白くしていた。

「甘いな、嬢ちゃん」

「…クソ、不意打ちなら一本取れると思ったのに…」

その日の1回目の出撃の後。

「おい、俺を戦線離脱させるな！死ぬまで戦わせろよ！」

中破して帰投した天龍が、入渠を拒んで喚き散らしていた。

「いいから、早く入渠してきなよ。そんなに怪我したら戦えないよ」

「うるせえ！お前は入渠してくれればいいだろ！俺はまだ戦える！」

一緒に出撃から帰ってきた川内や不知火も困り果てた様子だった。秘書官として執務室にいる龍田は、ただ微笑ましそうにそれを眺める。リンヒルはおもむろに椅子から立ちあがった。

「おお、我が艦隊の勇敢なる戦士、天龍君。君のような人間がいてくれることを俺は誇りに思うよ」

突如雄弁に語り始めたリンヒルを、艦娘たちは黙って見つめていた。

「天龍君、『死を恐れるな』という言葉があるな。これはどういう意味だと思う？」

「そりゃあ……」

相討ちも厭うことなく戦う決意のこと。そう口を開こうとしたが、それを遮ってリンヒルは続ける。

「そう、命の危険が伴うような事態に瀕しても冷静さを失わずに的確な判断を行えば、命拾いするし戦果を得られることもあるということだ」

天龍の意見とは全く違う内容。しかし、言われてみればその通りだとも思える言葉。

「さて、天龍君。そういった場面に直面した時、艦隊の状況や仲間たちの『その後』を見据えて最善を尽くすことができる賢い兵士か、それとも目の前の空気に頭を支配されて自ら火の海に飛び込んでいく勇猛な兵士か。お前は果たしてどっちだ？」



すでに、天龍の顔に反抗の色はなかった。リンヒルは天龍の背中をポンと叩く。

「まだ戦いは続くんだ。これからも、よろしく頼むよ天龍」

「…わかったよ」

ムスツとしたまま、天龍は執務室を出ていった。

「ありがとう提督」

「良いからお前らもチャツチャと入渠しろ。そんなカツコで居られたら気が散る」

「はい」

川内たちは執務室を後にした。

「アレで、天龍ちゃんなりの思いやりなのよ。わかってあげてね、提督」

先程まで黙っていた龍田が、ここでようやく口を開く。

「随分回りくどい気遣いだな。周りが駆逐艦ばかりなんだから、もつと対象年齢は低く

してやらなきゃ」

「そういう不器用なところも、天龍ちゃんの可愛いところなのよ」

昼になり、リンヒルたちは食堂で昼食をとっていた。リンヒルにとつて幸いなところは、大きなジェネレーションギャップにより、自然と周りとのコミュニケーションをとる機会が増えたことだった。性格や考え方の把握なども、スムーズに行える。

「ねえねえ提督提督！」

高いテンションでリンヒルの隣に座るのは、川内。彼女は日本の「忍者」に興味があるらしく、「西洋の忍者」ともいえるアサシンに対しても高い関心を持っていた。

「提督つてさ、アサシンとしてどんな仕事をしてたの？いろいろな聞かせてよ！」

「お食事中に話すようなもんじゃないな。沢山の人間を殺したさ」

「でも、殺してたのは悪い人なんじゃないの？」

「俺たちは正義のために戦っていたさ。だが殺していたのは必ずしも悪人ばかりでもなかった」

「どういうことなのですか？」

電が純粹な瞳をリンヒルに向ける。

「俺たちは、人々の自由を守るために、それを奪おうとするやつらと戦っていた。だが、奴らには奴らなりの正義があった」

「どういうこと？」

「過ぎた自由は、秩序の崩壊を招く。やつらは人々を思うままに統制することで、安定した秩序を保とうとしていた。その結果、中には人々を苦しめるような方法を取ろうとするやつもいた」

「戦争なんてそんなもんよね。お互い正しいと思ひ込んでるんだもの」

霞がその見た目に似つかわしくない、達観した意見を述べる。そして、電がぼつりと

漏らす。

「深海棲艦の皆さんにも…何か理由があつて戦っているのでしょうか」

「何言つてんだ電？」

声を這つて反論したのは天龍だった。

「あいつらは海に出た人間を無差別に攻撃してんだぜ？ そんなやつらが何か考えてるわけねえだろ」

「で、でもなのですよ…」

「いい、いい。お前がそういう変わったやつなのは知ってるからさ。ただ、戦つてるときにそういう気持ちは持ち込むなよ？ 戦いつつうのは殺るか殺られるか、だ」

「その通りだな」

「司令官？」

「少なくとも戦いのその場において、攻撃の意思を持つ敵に対しては身を守るために戦う他ない」

食べ終わった食器を重ねていく。

「迷うなんてのは生き残った後でいくらでもできる」

食堂がどこか重い空気に包まれてしまった。

「さて、食ひ終わったらしつかり休んどけ。今日はもう一回くらい出撃するぞ」

それだけ言うと、リンヒルは食器を下げ、食堂を後にした。

「さっすが提督だぜ。良いこと言いやがる」

昼食から二時間ほど置き、この日二度目の出撃だった。

「敵が見えたよ！軽巡が二体に駆逐が三体！」

『よし。単縦陣』

「突撃よ！」

「天龍様の攻撃だあ！」

「徹底的に追い詰めてやるわ」

「電の本気を見るのです！」

「ウザイのよ！」

いつも通り、距離感を計りながら主砲で削っていく。そう、いつも通りのはずだった。しかし意識していないだけで、天龍の頭の片隅には先程の食堂での会話が残っていた。そして、目にする。同じ軽巡の肩を持ち、沈まないよう抱えている深海棲艦を。

「ここで追撃するのは正義なのか？」

「天龍さん！」

「え？」

鈍い衝撃。天龍は水の上を転がっていた。そして今天龍が居た場所には、電。その小

さな体が、爆風に包まれる。

「電ああああ!!」

『どうした!』

「電が!天龍を庇って大破した!」

少し離れたところにいた川内が応答する。

「天龍は無事なのか!」

「無事みたいだけど…」

「天龍!?!天龍!」

「あ、ああ…」

満潮が声をかけるも、反応は臍げ。完全に自失の状態だった。敵は、大破した仲間を引きずり撤退を始めていた。

「進撃しようにも、電も天龍もこんな状態じゃ戦えないわね」

『わかった、帰投しろ。気をつけてな』

銭湯の休憩所のような入渠施設にリンヒルが入ってくる。

「提督」

先に入渠を済ませた川内と霞が椅子に座って牛乳を飲んでいた。

「電はこの奥か?」

リンヒルは暖簾の掛かっている方を指差すと、フラフラっと入っついこうとする。

「ちよちよちよ、ストツプ！提督、何しようとしてんの！」

「何って、容態を確かめに来たんだ」

「あ、待つ、中はお風呂みたいになってるのよ！あんたが入っちゃダメ！」

「風呂？風呂で怪我が治るのか？」

「お湯みたいに修復材が張られてるのよ！とにかく、そこから先には行ったらダメ！電の怪我はちゃんと治るから！」

「ならいい」

リンヒルは 入っついけないよ。という風に両手を上げ、満潮が服を引つ張っていた力を緩める。

「天龍は何してる」

「電のお陰で、無傷よ。ただ、帰投したら真っ直ぐ部屋に戻って行っちゃった」

「自分が忠告したミスを自分でやらかしたんだ。そりゃ誰だつて凹むさ」

「ちゃんと声かけてあげてよ。きつと、電がずつと向き合ってきた悩みに、初めて自分もぶつかつて混乱してるから」

「それなら妹がいるだろう。俺がすることついたら、イジるくらいだ」

手をピロピロと振り、リンヒルは入渠施設を後にした。

「何よあいつ…」

コンコン。扉がノックされる音が廊下に響く。

「いるか？天龍」

返事はない。が、呼ばれてるよ、と言う龍田の声が微かに聞こえる。

「いるな。入るぞ」

軽く開いた扉からスルリと部屋に入り、すぐ近くの壁にもたれかかる。扉は自重で自然に閉められた。視線の先には、リンヒルと目を合わせようとせず、テーブルに向かったままの天龍がいた。

「俺の名は天龍」

ニヤニヤしたリンヒルの突然のモノマネに、思わず天龍は顔を上げる。

「…で、なんだっけ？」

「は…？」

「俺の名は天龍…の後だよ。初めて無線で挨拶した時、なんか言おうとしてたろ」

「…提督さん？何をしているのかしら」

「いい、龍田」

リンヒルに殺気を向けようとした龍田を、天龍が制する。

「俺の名は天龍。フフ、怖いかな？」

「そうそう、それだ。何言おうとしたのかずっと気になってたんだ」

「ハツ…笑っちゃまうよな」

「その通りだな。敵への攻撃を躊躇った…ありや致命的だ。怖いかどうかって言ったら、ハッキリ言って電以下だ」

天龍の顔がどんどんうつつむいていく。龍田は困った眉毛をして天龍とリンヒルを見ている。

「第1艦隊は天龍を龍田と入れ替える。良かったな龍田、練度を上げるチャンスだぞ」

「え？アタシ？」

崩れつつある笑顔の仮面を、リンヒルに向ける。

「アタシなんて…」

「自分が攻撃を躊躇ったのは何でか、頭冷やしてよく考えろ」

龍田のセリフも、天龍の返答も待たずにリンヒルは部屋を出て行ってしまった。

「提督も、何か考えがあつてのことよ」

「…」

「だから、一緒に考えよう？どうして攻撃を躊躇ったのか」

「俺のことは気にするなよ」

「天龍ちゃん…」



「龍田は自分の出撃に集中してろよ。今の俺になんか構ってたら、お前も俺みたいに なっちまうぜ」

「司令官……」

執務室で、私室に備え付けてあるウォシュレット式トイレの説明書を読むリンヒルのところに、電が訪ねてきた。

「おお電ちようど良かった、この本わかりづらいんだ。ここどういふことだ？」

「え？あ、はいなのです」

トテトテと、リンヒルの横に近寄っていく。

「ほらコレ、何……」

「確かにわかりづらいですね……多分、水の温度を調整するダイヤルのことです」

「ダイヤル？」

「えっと、司令官がいつも使ってる無線の、音量を調整するツマミみたいなものなので  
す」

「こんなので水の温度も調整できるのか」

へえー、とリンヒルは感心している。

「あの、司令官」

「どうした？オヤツでも食いたいか？」

「いえ、天龍さんのことなのです…」

「アイツなら今頃氷にでも頭突っ込んでるんじゃないか？」

「なのですか!？」

「頭冷やしてるって話だよ」

「ああ…あの、天龍さんに、電は大丈夫だから気にしないでって、伝えて…」

「そんなことは自分で伝えろ。その可愛らしい口は何のために…」

むにつ、と、電の頬を軽くつまむ。

「今のアイツはいじけてる。お前は気にしない様に気にしちゃまってる。そんなんじゃない艦隊行動に支障が出る。しばらくは、龍田が第1艦隊に加わる」

「え?」

「ちようどいいだろ? 誰と組んでも柔軟に戦える様に慣れておかなきゃ」

「でも」

「今日はもう寝ろ。明日も出撃なんだ、人間、睡眠は大切なことだ」

説明書を閉じ、電の頭をポン、と叩いてリンヒルは執務室を後にした。困った表情の電だけが、1人取り残されていた。

「よし、出撃すんのはいつもの海域だ。突破できそうならそれに越したことはないし、まあ、しつかり練度を積んで来られるなら別に勝ちにもこだわんないから」

「はい！」

川内を旗艦に、龍田、不知火、電、満潮が出撃していく。

「敵を視認したわ！重巡、軽巡が1、他駆逐が2！」

『複縦陣。迎え撃て』

「いくよ！今日こそここ突破するわよ！」

私も、同じことを考えたことがあるわ。彼らは、何のために向かってくるのか。彼らにとつては、私たちの方が悪なのではないのか。結論は出せなかった。でもそんな時、私はダメージを受けた。私はそれで、頭が冷えた。どんな大義があれど、ここは戦場。殺らねば殺られる。正義がわからないなら、せめて自分が思う、悪ではないことをやれば良い。

だから、私は言う。

「死にたい船はどこかしら〜？」

殺される覚悟がある子だけ、かかってきて。

「艦隊が戻ったわ〜」

「おう、お疲れ」

「お出迎え、感謝します」

「龍田と不知火がまず入渠な。そのあと電と満潮」

「あ、私寄るところがあるの〜。電ちゃん、先に入ってる?」

「え? 龍田さん、どこに行くのです?」

笑い声だけ残し、龍田は建物に入って行ってしまった。

「おまえら、そんな格好でここにいたら風邪ひくぞ」

「わかりました。行きましょう、皆さん」

「さて、えむぶいびー、おめでとう川内」

「ふっ、なんか年寄り臭っ」

「うるせ、文句あんなら25m三連装機銃、やらねえぞ」

「え、ウソ! ヤダヤダ、ゴメン提督、冗談だつて〜カツコいい! よ、アサシン!」

「…フン、悪くないな」

静かな廊下に、扉を開く微かな音が響く。

「ど〜お、天龍ちゃん? 頭は冷えたかしら〜」

「…龍田! お前怪我…」

「うん、やつぱり天龍ちゃんの様にはいかないわね。少し食らっちゃった」

自責の念か、天龍はうつむく。

「なあ…こんな俺を、お前は蔑むか？」

「そおねえ…確かに、今のガツガツしてない天龍ちゃんは少し詰まらないけど…」

優しく微笑む。

「でも、そういう甘くて優しい所があるの知ってるし、好きだもの」

しばらく、天龍は龍田を見上げていた。そしてまた俯くと、何かを嘲笑う様に息を吐いた。

「優しい?…誰だよ、戦場でそんな生ぬるいこと考えてるのは。なあ、俺は誰だ? 龍田」

「さくあ? 誰なの?」

「へっ、天龍様だぜ? 泣く子も黙る、世界水準を超える軽巡洋艦だ」

愛刀を手に取り、力強く立ち上がる。

「慈悲は無え。『向かって来るやつ』は全員敵だ」

細く、しかし鍛え抜かれ引き締まった腕が、一日振りにその扉を押し開く。そこにいるのは、アサシン、リンヒル・フィリップス、提督。

「よう、腰抜け。ケツの穴は締めて来たか」

「どこだ。俺が倒すべき敵は」

椅子から立ち、ゆっくりと天龍に歩み寄る。

「流石よくできた妹だ、アイツならお前がいなくても攻略に何の問題もないだろうな」

天龍は言い返さず、黙って言葉を受け止める。天龍の横まで来て、リンヒルは横目で見つめながら言い放つ。

「お前がいりやもつと楽ができる」

気が抜けた様に、天龍は表情を崩した。

「へっ」

朝。リンヒルはカーテンから洩れる日の光で目を覚ます。布団もたたまず、寝巻のまま部屋を出ようとするが、腕には何故か籠手を着けていく。扉を開けると、剣を振り上げた天龍がいた。

「おりゃああああー！」

振り下ろされる腕を片腕で払い、もう片腕を天龍の喉元に突き立てる。小手に付いた引き金を引くと、そこに隠された銃口が——豆を吐き出し、天龍の額で乾いた音を立てた。

「まだまだだな、嬢ちゃん」

ふと、鼻をつく異臭に気づく。スンスンと臭いの元を辿っていくと、視線は天龍の足元の水溜りで止まった。

「ぞ…雑巾。バケツと雑巾！誰か！」

「う、うわ、待て！人を呼ぶな！頼むから——」

「お呼びですか、司令官」

「どうしたの!?!」

「なのです！」

「私に頼っていいのよ！」

ざわざわと、人が集まってくる。

「あ…」

漏れたのは、世界の終わりかのような天龍のか細い声。その直後。

「うわああああ!!」

結局また1日、天龍は部屋から出てこなかった。

## 第4話 エラー

「あ！おはようなのです、司令官！」

仲良さそうに廊下を歩いているのは、暁型4姉妹だ。

「これはこれはお嬢様方。本日も大変お美しい限りで」

リンヒルはわざとらしくくらい丁寧なお辞儀をする。三人は、ジョークだとすぐに関わり、それぞれのリアクションで返す。

「ふふっおはよう、司令官！」

「おはよう司令官。今日も、元気にやりますか」

そして、一人は大変気分を良くする。

「当然よ！何てったって、レディなんですもの！」

余りに予想通りのリアクションで、三人の妹達は思わず苦笑い。

「おはよう、レディちゃん。ピーマンは残さず食ったか？」

「も、もちろん！一人前のレディなんですもの！ちゃんんと全部平らげたわ！」

だが、リンヒルのこの質問には何の意味もない。何故なら…

「暁、朝ごはんはピーマンは出ていないけれど…」



「え！あれ？じゃ、じゃあなんでそんなこと聞いたの!？」

「レディなら、このくらい適当にあしらえないとなあ？」

「何よそれ!？」

「暁、完全に司令官に遊ばれてるわね」

「響と雷、今日は第1艦隊に混ざって海域進むからな、腹づもりしとけよ」

「わかった」

「雷に任せなさい!」

鼻歌交じりにリンヒルは廊下を歩いて行った。次に通りかかったのは、演習場が見える廊下。誰かが射撃訓練をしていた。ピンクの髪。不知火だ。リンヒルは近くのドアからコッソリ演習場に出ると、身を隠しながら射撃の的に近づいていく。不知火が次弾装填を終え、次の射撃を始める前に、的をヒョイと抱え上げた。

「司令官?」

煽るようにとぼけた表情で、リンヒルはチョコマカと走り始める。

「…上等です」

そのまま不知火は動く相手に対する射撃訓練を始めた。が、撃てどもやれども、的に命中しない。リンヒルは走りながら少し速度を緩めたり、急加速したと思ったらまた緩めたり、緩急を巧みに織り交ぜた動きで全く的を絞らせない。

「お、なんか面白そうなことやってんじゃん！」

「あれ、なんで提督が的持ってるの？」

「さつきから一発も当たってないっぼい！」

ぞろぞろと、艦娘が不知火の訓練を覗きに来る。いつの間にか、いつもの不知火が居る第一艦隊の射撃訓練の様相を呈していた。

「はあ…これだけやって当てられないのだからこれ以上は無意味ね。終わりにしましょう、皆さん」

「えー、なんだよ！もう少しで当てられるかと思つたのに！」

天龍が全く見当はずれな文句を言う。

「相変わらず規格外ね、クソ提督は」

「でも、私達もあの動きができるようになれば…この先もつと戦えるってことだよね」

「もういいかー？俺、飯まだなんだけど」

「はい。訓練のご協力感謝します、司令官」

「…これくらい朝飯前だったか…」

「ふう」

朝のお通じを済まし、リンヒルは腹を撫でながらトイレを出る。と、すぐに異変に気

付く。

「ん？」

ヤケに、静かだ。

「おい、第1艦隊の奴らー、出撃だぞー」

その時々には艦隊に組まれていない艦娘がグループを作り、食事を作っている食堂。負傷した艦娘がいない時には浴場として利用される入渠施設。艦娘たちの健康管理から装備の点検までを行う工廠。人っ子一人いない。

「どうなってる？」

放送で呼びかけてみようと思い、執務室に向かう。途中、何かの気配を感じた。気配の正体は、アツサリ見つかる。足元に猫が擦り寄ってきていた。

「猫だ」

ヒヨイと抱き上げて、正面から見据える。

「…ただの猫だ。どこから入った」

猫をその辺に放り、執務室に入って放送機材を繋げる。が、スピーカーから流れたのは耳障りなノイズだけ。頭が痛くなりそうで、リンヒルはすぐにスイッチを切った。そこで、廊下の方に再び気配を感じる。そこには、扉の隙間からこちらを伺う、先ほどの猫がいた。猫はぶいとそっぽを向くと、廊下を走っていく。リンヒルはそれに意味あり

げな何かを感じ、気がつけば席を立てて猫を追いかけていた。

廊下に出て、目の前に異変はあった。廊下の途中に大きな溝が幾つもできていた。少ない足場を、猫はそのしなやかな動きで走っていく。それを追いかけて、リンヒルも足場を伝っていく。その先には、この建物には無かったはずの2 m程の段差。猫がひとつ飛びで越えた段差を、壁を蹴って段差の淵に手をかけ、登る。次は一本橋だった。

「無茶苦茶だ」

「タカの目」を使うと、猫と一緒に走る少女のようなシルエットが浮かんだ。「タカの目」を解くと、猫の側には誰もいない。「再びタカの目」で見ると、やはり少女と一緒に走りながら、時々立ち止まり、誘うようにこちらに手を振る。

「オバケか?」

その先も、壁の装飾を伝って底の見えない崖を渡ったり、3メートルは続く溝を幅跳びさせられたり。少女はそんなリンヒルを楽しそうに見ながら、先を走り続ける。そして、明らかにそれまでとは雰囲気の違い、内装の空間に辿り着く。日本家屋の縁側のように、そこに日本水兵のような服装の少女が座り、その隣に先ほどの猫が丸くなって寝ている。

「道案内(ご)苦勞さん」

リンヒルは、彼女が先ほどの少女だと確信していた。

「ここまで付いて来れちゃうなんて、おじさん凄いね」

「まだ、『お兄さん』って呼んでくれ。『おじさん』はせめて30過ぎてからだ」

「ふふっ」

少女は正面に広がる景色に向き直る。

「綺麗でしょ、ここの景色」

「ん、いつも部屋から見てる景色だな」

それは、リンヒルがいつも執務室から見ている、海、海岸、遠くに見える島影。ただ、今いる場所だけが違う。

「なあ、ここはどこだ？なんで鎮守府のみんながいなくなった」

返事はすぐには帰って来なかった。少し空いた間の後、少女は寂しげにこちらを向く。

「また追いかけてっこしてくれる？」

「…ああ、今度は捕まえてやる」

「じゃあ、その時に教えてあげる」

「上等だ」

少女は立ち上がり、いま自分がいた場所へ来るようにリンヒルを呼ぶ。それに従ってリンヒルは縁側に立つ。下に地面は無かった。ただどこまでも深く、広い穴。その底の

方から、聞きなれた少女達の話し声が響いてくる。

「お前、名前は？」

「…エラーって、みんなはそう呼ぶ」

「ふうん。またな、エラーちゃん」

リンヒルは両手を広げ、その穴に飛び込んでいった。

「さあ、今日はどこに行けばいいんだ？」

目の前には、天龍、龍田、不知火、響、雷がいた。机を挟み、リンヒルは座っていた。  
「おっ？」

机には海図が広げられている。リンヒルはしばらくその光景を眺め、そして、今日の職務を開始した。その日は、羅針盤の調子がとても良かったという。

## 第5話 魔窟へ

「深雪ー、川内さーん、訓練の時間だよー」

敷波が開け放たれた扉の前に立ち、部屋の住人に声をかける。が、その返事は気力のないもの。

「ん」

「…あのさー、まだウチにはいないけど、初雪じゃないんだからもっとやる気のある返事してくんない？」

「わかってるけどー、なんかやる気出ないんだよねー。ね、川内さん」

その部屋にはもう一人、川内型一番艦、川内が遊びに来ていた。深雪と同部屋の吹雪は、食事当番で現在、後片付けの途中でここにはいない。

「てーとく、夜戦に付き合ってくれる約束だったのになー…」

「しょうがないじゃん、提督にだって仕事があるんだから」

二人の不機嫌の理由はわかっている。というか現在、鎮守府全体がこんなテンションだ。リンヒルが急遽、本営からの仕事で鎮守府をしばらく空けることになったのだ。その間出撃や遠征はなし。予定されていた今回の演習だけを済ませて、待機ということに

なる。その演習に出る予定の深雪と川内を同じく出撃予定の敷波が呼びに来たのだが、ご覧の有様である。

「それにしても何なんだろうね、急な仕事なんて」

提督になって日の浅いリンヒルにわざわざ本営から仕事がくるなどそうそうあることではない。そこまで思い至った敷波は、川内のやる気を奮い起こす魔法の呪文に辿り着く。

「もしかすると、提督としてじゃなくて、『アサシン』として仕事を頼まれてるのかも……」

ガバツと川内が体を起こす。

「提督が帰ってきたときに、いつでも胸を張って迎えてあげられるようにしなくちゃ！行くよ、深雪！」

「え!? あ、ちょ、腕引つ張らないで！」

「よし! 不知火さんももう待ってるよ!」

「マジ!? ヤバツ…それ先に言っつてよ!」

門の前に立つ憲兵が、正面から歩いてきた男に気づく。男は軽い調子で、憲兵に話しかける。



「その君、ちよつといいかな」

「なんでしようか」

男は懐から本營の判が押された封筒を取り出し、憲兵に見せる。

「この大將殿に呼ばれてきたんだけど」

憲兵は封筒をペラペラ、裏表を見返して男に付き返す。

「そんな話は聞いていない。お引き取り願おう」

「お、おいちよつと！」

憲兵はもう聞く耳を持たなくなつてしまつた。

「ふうん、そうかい」

男——リンヒル・フィリップスは一度建物から遠ざかり、去り際に全体を見渡した。建物上空に、瑞雲が4機。死角が無いように隙間なく巡回を続ける。

否。ほんの一瞬に過ぎないが、死角は存在する。リンヒルは憲兵や瑞雲の視線が自分からそれた一瞬を見逃さず、足元の海岸の崖に隠れた。少ない足場を伝い、焦らず、しかし急いで本營麓までたどり着く。鼠返しになつた崖が、上空の瑞雲から死角を生む。瑞雲が旋回するほんの一瞬、自分から完全に視線を逸らしたタイミングでリンヒルは崖を上り、目星をつけていた開け放たれた窓——今日は気温が高く、風を通していただけろう、そこに飛び込んだ。その時、廊下を歩いていた一人の職員と目が合う。当然、こ

の可能性は想定済み。そして好都合。職員が悲鳴を上げる間もなく、リンヒルは腕をひねりあげ、首を絞め、気絶させた。しばらくは起きないだろう。トイレに連れ込み、服を奪った。職員になりすましたリンヒルは、難なく巖——大將の部屋に辿り着いた。ノックをしてすぐに、返事が返ってくる。

「入れ」

扉を開け、部屋に入り、違和感にすぐさま気づいた。

窓の方を見て椅子に座っているのは、巖ではない。

椅子を回してこちらを見たのは、成人しているかも怪しいような少年だった。少年が微笑むのを合図にしたように、リンヒルが入った扉から憲兵が雪崩れ込んできて、リンヒルを取り囲んだ。数拍生まれた沈黙を破るように、憲兵がリンヒルに襲いかかる。後ろから襲い掛かってきた憲兵の警棒をカウンターで奪い取って組み伏せる。さりげに憲兵を盾にしたことで動きが一瞬間まった隣の憲兵の関節を取って押さえつける。リンヒルは、部屋にいた6人の憲兵をあつという間にねじ伏せて見せた。腹や肘を抱えて憲兵が転がる部屋に、気の抜けたような拍手の音が転がる。先ほどの少年だった。

「凄い凄い！参りました、降参です！」

「どうでしょうか、元帥殿」

扉から再び人が入ってくる。それこそが、今回リンヒルに仕事を依頼した巖だった。

「すまないね。私自身、君の戦いは見たことがなかったからね。少し試させてもらった」  
巖の謝罪よりも、リンヒルは気になっている疑問をぶつける。

「元帥って、どいつのことだ？」

「僕です」

「あ？」

「ファイル提督、君は初めて会うんだったな。そこにいる彼が、我らが海軍を取り仕切る、  
玲元帥だ」

リンヒルは丸い目で玲を見、そしてもう一度巖を見る。

「こんなチンチクリンが!？」

「彼は、若くして突出した指揮や運営の才能をもつ最年少の元帥だ」

「話は聞いていたし、実力は今見せてもらったよ。よろしく、ファイル提督」

「ああ…ま、まあ、仲良くしましょうや」

二人は固い握手を交わす。

「さて、ファイル提督。気づいていると思うけど、着任して日の浅いあなたに何故こうして  
面と向かつて仕事を頼むのか。それはあなたの持つその技術を見込んでのことだ」

「俺に『アサシン』として仕事をしろってことか」

「どうやらこの宿命からは逃れられないようだ。ファイルは思わず苦笑いを零す。

「で？俺は誰を殺せばいい」

そこに巖が焦った様子で割り込んでくる。

「いや、別に殺すことは目的ではないんだ」

「あなたは、『艦娘矯正所』という場所をしっているか？」

「いや。…胡散臭そうな名前だがな」

フィルの言葉を聞いてか、玲と巖は苦虫を噛み潰したような顔になる。

「本来なら、素行に問題のある艦娘がそこに運ばれて、教育を受けるといふ場所なのだが」

「少し前から…いや、本当はもつと以前から噂されていたのかもしれない」

そこで、玲は押し黙ってしまふ。

「なんだ？続きを言え」

「フィル提督。わかっていると思うが、ここは海軍で、彼はその元帥だ。言葉使いをわきまえろ」

「いや、いいよ。すでに兄さんの例もあるんだし、今更だよ。すまないね、フィル提督」

「いや、こちらこそ失礼した。して、その『噂』というのは？」

玲は少しためらい、口を開く。

「どうも、教育と称して艦娘を慰みに使っているらしい」

「…なこつたらうと思つ…いましたよ」

どの世界や国にも、似たようなクズはいるようだ。

「提督には、その矯正所に潜入して、もし規定を外れた処遇を受けている艦娘を見つけたら保護し、見つからなくてもなんらかの証拠を掴んで…」

激昂しそうな感情を押し殺し、あくまで元帥として指示を出そうとしているのが見て取れた。

「なあ、玲元帥」

言葉を遮ったリンヒルに、二人は怪訝な目を向ける。

「もつとわかりやすく指示を出してくれ。あんたは俺にどうして欲しいんだ？」

ハツとして、玲はリンヒルの顔を見た。「この人も」、すごい。僕の心の底を、既に理解している。

「艦娘を…救い出してやってくれ！」

「承った」

夜道を、一台のトラックが走っている。ヘッドライト照らす先に人影を見つけ、ドライバーはトラックを一旦停止させて窓から顔を出し、叫ぶ。

「おい、なに車道に突っ立ってんだよ」

人影は返事をせず、ただ歩み寄ってきた。そして運転席のドアの前に立つ。

「何…」

問いかける間も無く扉は開け放たれ、ドライバーは車外に放り出されると襟元を絞められ、眼前に刃を突き立てられる。

「…言え。お前、今なにを運んでる?」

「し、知らねえよ…」

体を大きく揺さぶられ、更に間近に刃が迫る。

「ほ、本当に知らねえよ!いつも運転席で待つてる間に積荷のやり取りが行われてんだ!なに積んでるかなんて知りやしねえよ!」

「…積荷を確認するぞ、一緒に来い」

「わ、わかった…」

目の前の男は刃を引つ込め、積荷の方へ歩き出す。ドライバーの男も、僅かに震える足で男の後を歩いていく。

ガコン、という音で扉のロックが解除される。勢いよく扉を開くとそこには…手足を縛られた、下着姿の10数名の少女の姿があった。

「な、なんだこりや!?!」

「これがお前が今まで運んでいた荷物の正体だ」

リンヒルは荷台の中の一番手前にいる少女に近づく。

「ひ、い、いやっ……！」

見知らぬ人間に怯えているのか、それとも「男」に怯えているのか。リンヒルはアサシンブレードで少女の手を縛る縄を切った。

「あ……」

「残りの奴らの縄も解いてやれ」

リンヒルは荷台から降り、ドライバーの男に向き直る。

「なにも知らなかったとはいえ、犯罪の片棒を担ごうとしていた自分を咎める心はあるか？」

「当たり前だ！俺は今まで、純粹にトラック転がして飯食って来たつもりだったんだ  
！」

「なら、このまま彼女たちを乗せて大本営に向かえ。話は俺が通しておく」

リンヒルはもう一度少女たちを見る。

「悪いな、もう少しここに乗っていてくれ」

ドライバーは荷台の扉を閉めると、運転席に戻ってトラックを再び走らせた。それを見送り、リンヒルはスマホを取り出す。そもそも電話というものを知らなかった自分に、鎮守府の皆が寄ってたかってスマホの使い方を教えてくれたことを思い出しなが

ら、リンヒルは元帥に電話をつなげる。

「…ああ、夜分遅くに申し訳ない。今、そちらにトラックが一台向かった。ナンバーは〇〇〇〇〇、積荷は…」

伝えるべきことを伝え、リンヒルはスマホをポケットに戻す。パーカーのフードを被ると、再び獣の巣窟へと歩み始めた。



## 第6話 急転

建物にはこれでもかというくらい、下手をすれば大本営よりも嚴重なのではと思わせる警備が張り巡らされていた。建物を隙間なく取り囲む警備員に、絶えず飛び交う無数の瑞雲。それを遠くから眺め、リンヒルは失笑を漏らす。愚かな、これではいかにも怪しいですよと言っているようなものだ。

建物の周りに広がる雑木林に身を潜めながら、トラックの運転手がいつも使っていたという搬出口に向かう。瑞雲はまだしも凡人がいくら警備にあたろうが、リンヒルにとっては大きな問題ではない。裏口から、建物に入っていく。広く、天井の高い搬出口は死角が少ないが、おあつらえ向きに天井を支える鉄骨が通っていた。壁に掛けられた変電盤や骨組みを伝い、天井の鉄骨に上っていく。

「あー、痛え」

「まだムチウチ治らねえの?」

扉を開けて入ってきた二人の声に、リンヒルは息を潜める。そっと腰につけたボイスレコーダーのスイッチを押した。

「あのガキ急に暴れ出しやがって……」

「葉が切れたんだろ？ イイ兆候じゃん。もうきつと葉以外のことどうでも良くなってるよ」

「馬鹿、一步間違えると興奮し過ぎて艷装召喚するの忘れたか？ 殴られてムチウチで済んだだけ良かったんだ…」

殺してやりたい。今、ここで。アサシンブレードを装備した両腕が疼くのを、精一杯押さえつける。ここはリンヒルのいた時代では無いし、海軍である以上は奴らを裁くのは自分ではなく法であり、玲元帥だ。

更に鉄骨を伝って窓にたどり着き、しばらく外を観察した。あれだけ飛び回っている瑞雲だが、箱庭のようになつた建物より内側までは監視していないようだ。窓を開けて建物の屋根に降り立った。瑞雲はいないが、窓から他の職員に見られてはならない。

しかし。と思つてリンヒルは事前に受け取つた、この建物の見取り図を広げながら、窓を眺めた。予想してはいたが、随分と部屋の配置が違う。どこが違うかは色々あるが、特筆すべきは見取り図に記された艦娘達の宿舍が無く、物置になつている。そして、階段は見取り図に存在しない地下へ続いていた。間違いなく、地下に何かがある。

今すぐに地下へ向かいたいが、その前にやるべきことがある。

気絶させた職員の服を奪い、この建物の執務室のある三階へ向かう。曲がり角に身を潜めて執務室のある廊下を覗き見ると、資料で確認した最高責任者の男を職員が部屋を

連れて出る所だった。

「何者かが侵入した形跡があります」

「なんだと!? まさかあのことがバレて…閉じ込めた艦娘を確認してくる、お前はここを見張っている」

「はい」

そう言つて男は護衛らしき職員を部屋の前に残して去つていく。男が階段を降りて行つた音を確認し、リンヒルは職員に近づいていく。

「なんだ貴さつ…」

腕を捻り落とし、首を絞める。ものの数秒で職員は気絶した。執務室の鍵をアサシンブレードでこじ開け、職員を引きずりがてら侵入する。怪しい資料は、鷹の目ですぐに見つかった。そこにはしつかりと、胸糞が悪くなるような悪業の証拠が記されていた。資料をポーチにしまい、内側のドアノブを破壊してからリンヒルは執務室を後にした。

仄かに慌ただしくなり始めた建物の中を警戒しながら、先ほど当たりをつけた階段へ向かう。10数段ほど降りた階段の先は台車やパイプ椅子などが置かれ、その先の壁には普通の扉よりもひと回りほど小さな扉が設けられており、一見すると水道管や電気設備を点検するためのものにも見えた。リンヒルが扉に手をかけようとした時、向こう側から何者かが扉を開いてきた。出てきたその男の顔面を掴んで押し込み、鳩尾に膝を2

発、そのまま床に頭を叩きつけて部屋に入っていった。

「な、なんだ貴様は！」

そこにいたのは、先ほどの最高責任者の男と、数人の銃を持った職員だった。

「撃て！殺してしまえ！」

職員たちは銃を構えようとするが、それよりも先にリンヒルの放った投げナイフがその握力を奪った。

「な、ば、馬鹿な」

蛍光灯に照らされた部屋に立ち入ると、いくつもある檻に、下着姿の少女が閉じ込められていた。間違いない、先ほど確認した資料に載っていた艦娘達だ。

憎悪に満ちた目で睨んでくる摩耶、鈴谷、荒潮。怯えた表情の神通、大潮、清霜、天津風。そして、既に正気も言葉も失い、虚ろな顔で、小便なのかなんのかを垂れ流す鳥海。

「…ひでえなこりや…」

もう一度男を見据え、口を開く。

「玲元帥の命でこいつらを救出しに来た」

「なんだと!?!」

リンヒルが腰のポーチから令状のコピーを取り出し、男の足下に放ると、男はこの世

の終わりのような表情でそれを眺めていた。

「もう証拠も手に入れた。諦めるんだな」

檻の一つの鍵をアサシンブレードでこじ開けようとする。

「や、やめろ！」

男がたるんだ腹を揺らして走ってきたが、その顔面に肘鉄をお見舞いするとも簡単に崩れ落ちた。

すべての檻を開けるが、皆リンヒルにお礼の口を開こうともしない。

「脱出するぞ、俺の側を離れるなよ。…その死体みたいになってるやつも、連れて行ってやれよ」

皆恐る恐る、信用していない表情ながらもリンヒルに従うようだ。鳥海を肩に担ぎながら、摩耶がこちらを睨みつける。

「今は仕方がなく従ってやるけどな、もうアタシは人間なんざ信用しねえからな」  
そう言いながら、慈愛に満ちた目で鳥海を見つめた。

「妹をこんなんにしやがって…」

鳥海は相当にひどい状態らしく、摩耶が体に触れるだけで呻き声を上げ身悶えていた。

「…行くぞ」

途中襲撃してくる職員や警備の人間を、投げナイフや武器を奪うカウンターなどであしらいながら進んでいく。この程度の敵なら大した問題ではないが、それにしても殺さずに足止めというのは神経を使う。時間をかけ、ようやく出口に辿り着く。

「出口だ……！」

「！待て！」

安心した大潮が駆け出したその時、砲撃が小さな体を襲った。

「大潮ちゃん！」

「大潮！」

心配する神通と荒潮が声を上げる。その時、背後から不快なしゃがれ声が聞こえてくる。

「ははは、いいで日向！そいつらを逃がすな！」

「はい提督、御命令通りに」

先ほどの最高責任者と、リンヒルたちを挟んで、戦艦日向。瞳から表情が感じられず、腕にはいくつか注射の痕が見える。思考の自由を奪う薬物でも投与されたか。

「日向、あんた……」

天津風が絶望の表情を浮かべる。かつての仲間だろうか。リンヒルは静かに、籠手に隠されたピストルの撃鉄を引く。

「!ちよつと待つて!あいつは……!」

「心配するな、殺しやしない。行動不能にはなつてもらうけどな」

リンヒルは勢い良く一步前に出、こちらを向いた日向の砲塔に向かつて銃撃した。すでに装填されていた弾丸はピストルの衝撃を受けてその場で爆発、日向の艦装を破壊した。

「なつ……!」

「戦闘……続行不能です……」

アタシは今日、信じられないものを二つ見た。もう、助からないのだろうと思つていた。時々檻から連れ出されては、薬を嗅がされて無理やり興奮させられ、男たちの慰み者にされ、飽きたらまた檻に閉じ込められる。いずれは自分も、あの妹のように何も考えられなくなるのだろうと思つていた。

そんな時に、助けが来た。自分たちを散々弄んできた男たちを殴り倒していく様子は最高にスカツとした。でも、まだその男ことは信用していなかった。ただ、その男は強かった。幾人もの警備を物ともせずアタシたちを守り、建物を進んでいった。そして男は、艦娘すらも倒して見せた。それも、艦娘の中でも特に強力な力を持つ、戦艦日向。気がつけば、少なくともこの男の側について、命の危険はない。そう信じる自分がいた。

そして今、男はアタシたちと一緒に、へたり込む糞野郎を睨みつけている。一步、また一步と、男が糞野郎に歩み寄っていく度にビクビクと体を震わせて、とても滑稽だった。「ま、待つてくれ！アタシが悪かった！この通りだ！だから助けてくれ！」

惨めに、命乞いを始めた。

「そ、そうだ、金をやる！いくらでも出す！だから許してくれ！」

「ふざけんな！許すわけねえだろ！」

男もそう言うだろうと決めつけ、アタシは糞野郎を睨みつける。だが、男は少し考える素振りの後、ニツと微笑んで糞野郎に語りかけるようにしやがみ込んだ。

まさか、そんなハズは…

「へえ？幾らくれるんだ」

アタシも、鈴谷たちも、絶望の表情をしていた。逆に糞野郎は、救われたような晴れやかな顔をしていた。ここまできて、この男は金で裏切るのか…？結局アタシたちは助からず、このままなのか…

「ひ、100万やる。どうだ？」

「んー、足りない。もつとどうにかならないか？」

こちらの気など知らず、男と糞野郎は楽しそうに交渉を始める。悔しい…なぜ、一瞬でもこの男を信用しようなどと思ったのか。



「500万。どうだ」

「まだ足りないな」

しかし。

「いい、1億。これで手を打たないか…?」

「足りない」

そんな予想もまた、裏切られることになる。

「5億!これ以上は出せん!」

「全然足りない」

この男は。

「20億!ここ、これが限界だ!」

「足りない」

最初から許す気などない。

「あのさあ」

男は籠手のついた腕で糞野郎の顔を掴み、撃鉄を引く。

「人の命弄んで、『それっぽっちの』金で許されると思ってるのか?」

「そこまでだ、ファイル提督」

聞き覚えのある声に振り向くと、そこには背は低いが…純白の制服を身に纏い、襟元

に輝く勲章がその階級を示す。海軍元帥とその艦娘、武蔵が立っていた。

「良くやってくれた。証拠も掴んでくれたか?」

「ここに全部」

フィル提督と呼ばれたその男は、腰のポーチから紙の束を取り出してヒラヒラと見せびらかす。武蔵は艤装を持っていないアタシたちと大破して倒れている日向を見た後、フィル提督に視線を向ける。

「まったく、志庵提督といい、宿毛の提督といい、近頃の提督はどうなっているんだ…」  
呆れたように喋りながら、武蔵は糞野郎に歩み寄って行き、見下ろす。

「大本営までご同行願おう」

「…くそう…」

「こいつの処遇はどうする?」

フィル提督が日向を指し示しながら元帥に問いかけた。

「命令とは言え人間と事を交えたからね…提督のところ異動処分つてところでどうだい?」

「お、いいね。それ最高」

「おい!」

余りにサラサラつと交わされる会話に、アタシは思わず割って入った。

「そんなんでいいのか!? つーかさつきからお前何なんだよ! 人間のくせに艦娘を倒したり! 変な金額交渉してアタシらのこと不安にさせたり! 自分を殺そうとした艦娘を引き取ったり!」

「何って言われても…日向(コイツ)に関しては初めからそういう予定になつてたし」  
「心配しなくても、君たちについては本營で責任をもつてケアをすることになつてる。車が来ているから、乗つて」

「いきましよう、摩耶さん」

気絶した大潮を抱きかかえて神通が立ち上がり、残りの艦娘もそれに従う。

「チツ」

アタシはもう一度フィル提督を睨み付ける。

「おい、アタシ」

「あ?」

「助けてもらつたことには礼を言う。だが、妹をこんな風にした『人間』をアタシは信用しねえからな」

「そうかい。それじゃあな」

フィル提督はヒラヒラと手を振り、あとはそつぽを向いてしまった。

「…フン」

アタシはもう一度鳥海を担ぎなおして、車に向かった。小型バスのような車の前に並んだりムジンには、先程の糞野郎と日向が縛られた状態で乗せられていた。

「あれ？あいつ、あの提督の所にやるんじゃないやなかったのか」

「その前に色々と聴取するんですって」

見張れるようにだろうか、糞野郎と日向の後ろの席に元帥と武蔵、フィル提督もいる。先程はそこまでの余裕がなかったが、改めて観察するとまるで子供の様な背丈と顔立ちだ。

「摩…耶…姉…」

担がれていた鳥海が、何日ぶりかの意味のある言葉を発した。

「鳥海…?」

「摩耶…姉…いるの…?」

思わず、目頭に熱いものがこみ上げてくる。

「ああ、姉ちゃんはここに居るぜ」

「いる…のね…摩耶姉が…いる…」

二台の車がうなりを上げ、魔窟を後にした。

日向の聴取が済むまでの間、リンヒルは横須賀で待機することになる。という訳で初めて、この時代の都会に繰り出していった。決して、東京のように馬鹿高い高層ビルが立ち並んでいるわけでもない。が、この時ばかりは、リンヒル・フィリップス。完全にお上りさんである。

灰色の石で平らに慣らされた道を自動車が無数に駆け巡り、その上には赤、黄色、緑の明かりが点いたり消えたり。無機質な四角い建物には色鮮やかな看板が張り付き、数え切れないほどの人、人が絶え間なく出入りする。周りをキョロキョロ見渡しながら歩くりンヒルの姿は、さぞかし滑稽に、初々しく見えた事だろう。

そんなりンヒルの心を落ち着かせるのは、道端で弦楽器を弾き歌を歌ったり、音楽に合わせてクネクネと舞う若者。ちよつとした段差に座り込み、会話に耽るいい年の者たち。そして、言葉たくみに人々を誘い込もうとする客寄せ。

文明が幾ら進歩していても、人の本質という者はそうそう変化する者では無いらしい。

「あらく、カッコイイ男の人！」

こつこう言つた者たちもまた……

「ねえねえ、私、カラダには結構自信あるんですよ……ドキドキ、しちやいません？」

長い黒髪が美しい女性が、腕に絡みついてくる。

「かわいい子ちゃんに抱き着かれてときめかない男なんてこの世にはいないさ」

この時代の娼婦か、それとも盗人か。普段であればそつなくやり過ごす事など訳無いが、この時のリンヒルは別の事に気を取られてしまった。

女性が抱きついてきたところに肌色の粉が付着し、粉が剥がれた腕には驚くほどに白い肌が覗いていた。女性が血色よく見せるために、頬に肌色の粉を塗りつけると聞くが、この肌の色はそれどころでは無い。

その時、腰の辺りから全身に掛けて感じた事の無い衝撃を感じ、リンヒルは意識を失った。

「ファイル提督はまだ戻ってないのか…」

玲は、なぜだか嫌な予感が収まらなかった。

「なれない都会で迷子になっているのでしょうか？」

「あれ程の男が、道に迷ったりするものだろうか…」

「それほど凄いの？ファイル提督は」

執務を手伝ってくれている大和と武蔵が、ファイル提督の話題で華を咲かせる。そんな時、大淀が部屋に入ってきた。

「玲元帥、志庵鎮守府の大淀さんから入電です」

「回してくれ」

「提督からでなく大淀が？」

玲と同じ疑問を、武蔵も持ったようだ。不安がさらに強くなる。玲は恐る恐る電話を取り、聞こえてくる声に耳を傾けた。内容は、想像するに余りあるものだった。いっぴくなく深刻な表情のまま受話器を置いた玲に、大和や武蔵にも緊張が走る。

「…玲？」

「大和。武蔵」

席を立ち、怒りのこもった瞳で言い放った。

「連合艦隊を編成するぞ」